

令和2年1月7日

学位請求論文（課程博士）審査報告

学位請求論文： 否定疑問文「(の) ではないか」についての研究

学位請求者： 文学研究科博士後期課程日本語日本文学専攻 凌 飛

審査委員

主査	文学部教授	高橋雄一
副査	別府大学客員教授	松本泰丈
副査	文学部准教授	阿部貴人

審査報告

凌飛氏の学位請求論文「否定疑問文「(の) ではないか」についての研究」は、現代日本語における「(の) ではないか」の諸用法についての総合的な研究である。

凌氏は、天津外国語大学大学院の修士課程在学時からこのテーマに取り組み、専修大学大学院博士後期課程でも研究を続けてきた。博士課程在学中には4本の論文を発表し、うち3本がそれぞれ博士論文の一部となっている。

現代日本語の否定疑問文「(の) ではないか」については、これまでいくつかの研究があり、どのような用法のタイプがあるかは一通り明らかになっているが、まだ研究の余地のある分野と考えられる。また、今回、凌氏が併せて取り上げている「じゃん」については、地域方言や首都圏の新方言として「(の) ではないか」とは別に論じられることが多かった。下に凌氏が序論で挙げている用例を引用する。

- (1) これはすごい、純金ではないか。
- (2) A：同級生に田中さんという女の子がいたじゃないか。
B：ああ、髪が長くてやせた子ね。
- (3) ここにあるじゃん。

凌飛氏の研究は、記述的に用法を分類している諸研究を把握した上で、独自の分類を示し、さらに、国立国語研究所等が作成した現代日本語のコーパス（ここではコーパスとは「言語を分析するための基礎資料として、書き言葉や話し言葉の資料を体系的に収集し、研究用の情報を付与したもの」とする）を利用した調査により、確実な根拠をもとにした調査結果を

示したものである。さらに、「(の) ではないか」に類する表現として、首都圏を中心に共通語の中で使われる「じゃん」も研究対象とし、「(の) ではないか」と関連付ける立場で先行研究を参照し、コーパスによる調査を行い、独自の論を展開したものである。

以下、博士論文の内容を章ごとにまとめて述べる。

まず、第1章「先行研究の概観」では、1980年代の終わりからの「(の) ではないか」についての研究の進展をまとめている。「(の) ではないか」は、本来は否定疑問文であるものが確認要求などの機能を持つようになったとされる。また、確認要求表現などの用法は、聞き手に共通認識を要求するかしないかによってタイプが分けられる。こういった先行研究における議論の多くは凌氏の修士論文でも取り上げられているが、今回、新たな文献も加え、より深い理解と共にまとめ直している。さらに、博士論文では2種の研究を加えている。1つ目は「文法化」である。これは一般言語学において通言語的な観点から歴史的变化について論じられるものであるが、凌氏はそのような文献も参照した上で、特に日本語を対象とした研究の可能性を論じている2つの文献についてまとめている。これは後の章で「(の) ではないか」の分類について検討する際に役立てられる。2つ目は「じゃん」である。地域方言であったものが首都圏で新たな意味・機能を獲得して広まったとする研究と、それを「(の) ではないか」と関連付けて確認要求表現の一つとして論じている研究をそれぞれ参照している。

次に、現代語のコーパスによる調査結果が示されている第2章「BCCWJによる「(の) ではないか」の実態調査」と第3章の「各バリエーションにおける使用傾向と使用頻度」、さらに調査を踏まえて凌氏自身の論を示した第4章の「「(の) ではないか」の分類と用法」について述べる。この部分の内容は、凌氏がこれまで発表した3本の論文が元になっている。第2章では、「(の) ではないか」が取りうる様々な形式を「文末詞の変化」「タ形との共起」「丁寧形」「終助詞との共起」「「だろう」の共起」という下位分類として整理し、現代語の各種の書き言葉を集めたコーパスを使用して、実際によく現れる形式と現れない形式を調べている。第3章では、先述のコーパスに含まれる様々な種類の文章ごとに、どのような種類の文章にどのような形式が現れるかということ調べている。第4章では、仕事の場面での話し言葉のコーパスからのデータを利用しながら、凌氏自身の「(の) ではないか」の分類を示している。凌氏の分類も、基本的には先行研究と同様に「(の) ではないか」を大きく3つに分類するものであるので、ここではまず、3つの大分類について、構文上の区別や文法化の度合いを見ている。その上で、凌氏によるより詳しい内訳について説明をしている。

第4章で話し言葉のコーパスによる調査をしたことにより、話し言葉には「じゃん」が多用されることが分かった。第5章の「「じゃん」について」では、各種の話し言葉のコーパスを使用し、「じゃん」の使用実態を調査している。この章はこれまでと同様の詳細な議論

は尽くされていないように見受けられるが、十分に納得の行く結果は示されている。

最終試験（口述試験）では、主に次のようなことが指摘された。

まず、論文の題目で「否定疑問文「(の) ではないか」としている点についてであるが、確かにもともと「(の) ではないか」は否定疑問文であるので、“出発点”としての名づけと言えるが、否定疑問文ではない部分も含めた総称としては適切な名称を考えるべきではないかという指摘があった。また、本文中で使われる「バリエーション」についても、本来は「同じ意味を表す変異形」という意味で使われるので、少なくとも「(の) ではないか」のタイプごとに区別されるべきではないかという指摘があった。

第2章、第3章のコーパスを利用した調査については、「(の) ではないか」の「の」はどのような場合にあり、どのような場合にないのかをはっきりと示した方がいいという指摘があった。また、今回は後接形式に注目したが、前接形式にも注目することにより、「(の) ではないか」のタイプによって違いが見られるのではないかという指摘があった。さらに、コーパスの種類にも関係して、要素分析をする際には書き言葉、話し言葉の違いに注目すべきであるという指摘もあった。

第4章で示されている凌氏の分類については次のような指摘があった。まず、文法的に可能とされる形式でも、実際には用例が現れない場合に、「その後接形式とは共起しにくい」と述べるのには疑問があり、「一緒に現れにくい」というように言うべきだという指摘があった。これに関しては、文法的に可能とされる形式の中で現れやすいもの、現れにくいものを区別することについて言及している文献もあるので参照してもらいたいという指摘もあった。また、「ようではないか」を意志の表明と勧誘を表すとする点について、それは「よう」が表現していることであって「ではないか」の意味・機能ではないのではないかという指摘もあった。これは先行研究の問題ではあるが、それを凌氏が克服することを期待するコメントもあった。

「じゃん」については、「(の) ではないか」と同様の詳細な記述があるといいという指摘があった。これに関しては、本文では形容詞が前接する例が多く挙げられているが、動詞が前接する例もあるはずだという指摘もあった。また、今回の調査では「じゃんか」のデータは得られなかったようであるが、方言辞典では「じゃんか」という形式が取り上げられていることも指摘された。

以上のように多くの指摘があったが、審査の結果、凌飛氏の論文は、これまで別々に論じられることの多かった「(の) ではないか」と「じゃん」を統一してとりあげ、実例にもとづきつつ形式から意味・用法に渡って精査を進めていることから、高く評価されるものと考え、博士の学位を授与するに値する論文と判定した。